

書評

外池 智著

『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究
—『総合郷土研究』編纂の師範学校を事例として—』

伊 藤 純 郎*

本書は、現在秋田大学教育文化学部助教授である著者外池智氏が、1999(平成11)年9月に筑波大学大学院博士課程教育学研究科に提出した博士学位請求論文「昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究—『総合郷土研究』編纂の師範学校を事例として」に若干の修正を加え、NKS出版より公刊したもので、以下に示すように、序章・終章を含めて8章(25節)で構成される。

序 章 本研究の目的

第一章 戦前における郷土教育の系譜と昭和初期における教育政策の動向

第二章 「教育の実際化、地方化」の実現と郷土教育関係施策

第三章 郷土教育の振興と郷土研究の確立

第四章 小田内通敏の郷土教育論と郷土研究論

第五章 山梨県師範学校における郷土教育の実践的展開

第六章 『総合郷土研究』編纂対象地における郷土教育の展開—秋田県、茨城県、香川県を事例として—

終 章 本研究のまとめと今後の課題

参考文献・あとがき・人名索引

本書は、「昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究」という題名や各章の表題からうかがえるように、1930年代の郷土教育運動の諸相を、『総合郷土研究』の編纂に関わった師範学校に焦点をあて、具体的には、山梨県師範学校および秋田県・茨城県・香川県の各女子師範学校を事例として考察したものである。

※筑波大学大学院人文社会科学部研究科

郷土教育運動を研究テーマとする評者が著者と初めてお会いしたのは、1992年11月14日、文京区民センターで行われた、現在筑波大学附属学校教育局教育長谷川彰英先生が主宰する「連続セミナー授業を創る」秋季例会であった。当時著者は栃木県立矢板東高等学校社会科教諭で、「地域からの平和教育—戦争体験を生かした15年戦争学習」のタイトルで模擬授業を行った。授業後の討論会で司会をつとめた評者は、「大柄な身体から発散されるエネルギッシュな授業」に衝撃をうけた記憶がある（拙稿「栃木の若大将の授業を斬る」『Part II』No23, 連続セミナー授業を創る, 1993年）。その後、郷土教育を研究テーマに大学院博士課程の道を歩まれた著者に、修士論文や博士論文執筆の参考ににならないアドバイスをさし上げたことがあったから、本書を著者から恵贈されたときは、一読者として以上の感慨をもって本書を手にしたことを覚えている。

まず、各章ごとの内容を大まかに整理しておきたい。

問題意識と先行研究の検討、本研究の目的と各章の概要の二節からなる序章では、郷土教育の「施策、理論研究、郷土教育実践それぞれ個別の事項を中心とした先行研究は存在するものの、それらの相関関係を踏まえて包括的に捉えた研究への取り組みは未だ端緒についたばかりである」（9頁）という研究状況をふまえ、①郷土教育関係施策の検討、②文部省嘱託として郷土教育運動に深く関与した小田内通敏の郷土教育論、郷土研究論の理論的解明、③山梨県師範学校をはじめとする『総合郷土研究』編纂対象の師範学校における郷土教育の実践的展開の解明の三点が研究の目的であることが述べられている。

第一章から第三章は、大正中期から昭和戦前期、具体的には1917(大正6)年の臨時教育会議から、1935(昭和10)年山梨県師範学校における『山梨県総合郷土研究』編纂に至る過程における郷土教育の歴史を、教育政策の動向と郷土教育関係施策の視点から考察したものである。この三つの章は、先述した研究目的の①に該当するもので、本書が研究対象とする『総合郷土研究』の編纂過程や「総合的郷土教育」を実践した師範学校を考察するうえで、重要な基礎作業ともなっている。

日本社会科教育学会誌『社会科教育研究』第78号(1997年)に発表した論文「小田内通敏の郷土教育論の実践的展開」をもとにした第四章は、いうまでもなく研究目的の②に相当するとともに、第五章以下の各師範学校における『総合郷土研究』を解明するうえで不可欠な小田内の郷土教育と郷土研究の理論を考察した

ものである。

第五章と第六章は、研究目的の③に該当するとともに、博士論文としての本書の中核をなすものである。第五章は、山梨県師範学校における『山梨県総合郷土研究』の編纂過程と同附属小学校における郷土教育を考察したもので、一部は「山梨県師範学校における郷土教育の総合性」と題して『筑波社会科研究』第17号（筑波大学社会科教育学会、1998年）に発表したもの。続く第六章は、その後の『総合郷土研究』の編纂対象地である秋田・茨城・香川各女子師範学校における郷土教育の実践的展開を検討したものである。

終章では、本研究のまとめと今後の課題がそれぞれ三つの項によって整理され、最後に「郷土教育は、昭和初期の混迷する社会状況の中、それまでの知識偏重、画一的な教育を反省し、それを見直すべく地域、郷土を中心とした教育の再編成の試みであった。今日、こうした郷土教育を取り上げ、その歴史の実相を明らかにしていくことは、こうした社会科の教科としての本来的、本質的在り方を歴史的観点から究明するものであり、さらには地域、郷土における学校や教育の在り方を究明するものである」（472頁）という、著者の総括が記されている。

本書の第一の特徴は、「『総合郷土研究』編纂の師範学校を事例として」という本書の副題から明らかなように、山梨県師範学校に始まる『総合郷土研究』の編纂過程を、秋田県・茨城県・香川県の三つの師範学校を事例に、小田内の郷土教育論と郷土研究論に目配りをしながら、考察したことである。郷土教育運動に関する先行研究が昭和初期から1930年代を研究対象としていたのに対し、本書は、郷土教育運動の第二段階ともいべき山梨県師範学校をはじめとする四つの師範学校における『総合郷土研究』の編纂過程の解明や「総合的郷土教育」の具体相の考察を試みた点が評価できる。

第二の特徴は、郷土教育運動を社会科教育の視点から考察することを通じて、「近代教育における昭和戦前期の特徴やその位置付けを明らかにし、さらには戦後の教育改革の意味を改めて問い直すこと」（22頁）を試みたことである。

第三の特徴は、本書が、評者が拙著『郷土教育運動の研究』（思文閣出版、1998年）の終章で掲げた「残された課題」——「郷土教育運動としての考察の範囲を昭和十二年の「総合的郷土教育」で区切り、郷土教育が「日本精神涵養運動」に変質した意味を掘り下げて考察することをしなかった」、「総合的郷土教育」の全貌

を国民学校期までも対象として解明したうえで、郷土教育運動で主張された郷土教育論を再考する作業」(418～419頁)——を研究課題としたことである。評者が本書を一読者として以上の感慨をもって手にしたもう一つの理由はここにある。

それだけに、本書を通読したとき感じたことを、二点ほど率直に申し上げるならば、第一点は、「社会科教育史」研究として、本書で解明すべき最大の研究課題である秋田・茨城・香川各師範学校における『総合郷土研究』編纂過程と「総合的郷土教育」の解明と考察がかならずしも充分でない、ということである。1936年、文部省は、山梨県に続いて秋田・茨城・香川の三県を指定し、各師範学校を中心とした『総合郷土研究』の編纂を企図し、そのいずれにも小田内が深く関与した。本書の第六章は、このことを具体的に考察したものであるが、本来ならば一章構成で、第六章～第八章として分析するだけの内容量をもつ研究課題がそれぞれ一節構成で考察されていることからうかがえるように、分析不足の感はいなめない。

分析不足の要因としては、さしあたり次の二つが考えられる。一つは、『総合郷土研究』編纂過程の考察に際し、昭和12年3月27日に公布された「師範学校教授要目中改正」(文部省訓令第8号)の分析が行われていないことである。同改正では、日本地理の教授要目が「愛国心ノ涵養ニ資スルト共ニ地方研究ト相俟ツテ愛郷心ノ養成ニカムヘシ」と規定されたことから明らかなように「愛国心ノ涵養」や「国民精神ノ涵養」がよりいっそう強調されたことで知られる。この改正と『総合郷土研究』編纂との関連の考察は必要不可欠かつ重要な作業と思われる。もう一つは、『総合郷土研究』編纂対象地における郷土教育の展開の解明に際し、県レベルでの政治・社会状況と教育行政との考察が、例えば、当時推進された経済更生運動関係の表記がすべて「更正」となっていることに象徴されるように、正確になされていないことである。たしかに、各節の第一項で〇〇県における郷土教育の概要は記されているが、あくまで概要にすぎない。

第二点は、「社会科教育学」研究として、1930年代の郷土教育や『総合郷土研究』編纂のもつ歴史的意義を社会科教育の視点から問いたず力が弱かったことである。このことは、先に引用した拙著の「今後の課題」に即していえば、「総合的郷土教育」の全貌を解明したうえで、郷土教育運動で主張された郷土教育論の社会科教育の視点から再考する」作業や、著者の総括に即していえば「郷土教育の歴史的実相を明らかにすることで、社会科の教科としての本来的、本質的在

り方を歴史的観点から究明する」視座が、博士論文執筆時においては不十分であったことによるものと考えられる。

拙著『郷土教育運動の研究』で詳しく説いたように、1930年代の郷土教育運動は、「郷土研究」の方法を身につけた「地方事情」に詳しい優良な「村住み」の師範生を養成し、続いて、師範生が赴任先の小学校で「地方ノ實際生活ニ適切ナル教育」を実践して児童に正しい郷土意識を付与することで、「明日の村落」の樹立を目的とした、いわば「郷土認識建設運動」（126頁）である。そして、郷土教育運動の実践の場の一つが各府県の師範学校であった。

幸いなことに、著者は現在、秋田師範学校を前身とする秋田大学教育文化学部で教鞭をとられている。著者にとって、郷土教育の研究と実践は、研究テーマであることに加え、大学人として大きな意味をもつものとなろう。郷土研究に興味や関心を抱く教育学部生を養成し、彼らが赴任先の学校で郷土教育を実践することで、児童・生徒に自分たちの地域・郷土に対する知識や認識を養成するといった将来の社会づくりにむすびつく教育が、現在の郷土教育であるからである。

周知のように、生活綴り方による教育文化運動である「北方教育」の担い手は、成田忠久が秋田市で主宰した北方教育社につどう青年教師たちであった。1981年、名著『桃太郎像の変容』（東京書籍）により毎日出版賞を受賞した滑川道夫もその一人であった。くしくも、本書が出版された2004年は、北方教育社創設75周年の記念すべき年にあたる。

そうした意味で、著者に求められる次なる課題は、本稿で指摘した二つの課題、さしあたりは、秋田県師範学校における「総合的郷土教育」の具体相を当時の秋田県の政治・社会・教育状況にも目配りをしながら詳細に解明し、それを社会科教育や戦後の教育改革の視点から問い直す作業とともに、第二の成田忠久や滑川道夫を育成すべく郷土教育の現代的意義を学生に教授することかと思われる。

著者もその点は充分意識されているようだ。事実、本書の「あとがき」には、次のような一節がある。

本書をまとめることで、郷土教育研究は一区切りを迎えるが、むしろこれを端緒として、今後さらに事実認識に基づいた社会科教育の在り方、そして学習や教育の本質的在り方を「地域（郷土）から」の視点から研究していきたいとの気持ちを新たにしていく（505頁）。

著者に課せられた課題と期待は大きい。

外池智著『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究

—『総合郷土研究』編纂の師範学校を事例として—』

NSK出版, 2004年, 9,410円